

鬼婆との出会い

大学受験に失敗した後、浪人するよりはと就職した三崎町大学では、講師室受付に配属され、講師の先生の控室でお茶汲みをする事になった。

この部屋を取り仕切っている千葉さんが、鬼婆と恐れられているスーパーウーマンである。とにかく仕事がきっちりしている。会議で使ったグラスを洗うように言われていい加減に洗ったら、太陽に漉かして、「ここが曇ってる。やり直し。」と200個全部洗い直した。電話の対応言葉遣い、一々注意された。

もともと女の仕事だと思っているお茶汲みを、「何で男の俺が」などと思っているから、良い仕事などする訳も無し。妃殿下から「他に出来ること無いんでしょ。」と言われていなかったら、飛び出していたかも知れない。

ある日とうとう言われた。「あなたの铸れるお茶。いったい一杯いくらなの？給料を1ヶ月で铸れる数で割ってごらん。」

「先生方は90分の授業の間にここで休まれるの。置かれたお茶を20分も30分も経ってから飲むのよ。」

確かに自分の铸れたお茶は数十秒で粉が沈んでしまい、色の透き通った水になる。色付き水だとの批難もあながち嘘ではない。見ていると、千葉さんの铸れたお茶は違う20分経っても30分経っても緑色で濁っているのだ。

同じ茶葉同じお湯同じ道具を使い、どうしてこんなに違いが出るんだ？

注意して見ていると、お茶は直接薬缶に入れない、必ず茶缶の蓋にとって半分戻す。こうする

と粉茶になった部分を薬缶に入れないで済む。お湯はいっぺんに注がない、葉っぱを濡らした後、微妙に何秒か待ち、一気に入れる。

茶碗に注ぐ時に最期の秘密がある。茶碗の壁面に沿うように斜めに注ぎ入れるのだ。こうすると自然に渦が出来て粉茶が沈まなくなる。

訳がわかってしまえば、簡単なことだが、職業として行なうからには、何事にもポイントがある。それを見ようとするか、しないかで、結果が決まる。

先輩の女子事務員が、先生から「熊君が来ているなら、熊君に铸れて貰って。」と言われたと憤慨して言いに来た。「やったー。」と思った。

厳しく言われた意味はこういう事だ。

